

Persona 3 — Awaken your Soul—

薬田レオ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2009年。「Unknown」の都市伝説と無気力症患者の大量発生が世間を騒がせていた。

そんな年の4月、月光館学園高等部に編入した少年——有里湊は異形の怪物・シャドウとの闘いに特別課外活動部の一員として、そして「仮面ライダーアギト」として身を投じることとなる。

蠢く闇の力。甦る10年前の記憶。暗躍するもう一人の「ワイルド」。

湊の見出す「答え」とは。

目覚めろ、その魂。

目次

序章

プロローグ

1

第一章

Episode. 1 誕生の春

3

Episode. 2 戦士降臨

8

序章 プロローグ

死は万人に平等に訪れるというが、これには少し語弊があるだろう。確かに、生きとし生ける者の全てがいずれ死を迎えるが、その結末は不平等なものである。

清く正しく美しく生きてきた者が非業の死を遂げることもあれば、極悪非道な塵が満ち足りて逝くこともある。

ゆえに死ほど不平等で理不尽なものはないだろう。まるで人々の道徳観念を嘲笑うかのように命を刈り取って行く。

それでも人間は善き行いは善き結末をもたらすことを信じ続ける。それは善人が報われて欲しいからなのか、自分が平穏な終わりを迎えたいからなのか。

しかし、現実はその甘くない。地獄というのは音もなく忍び寄って来るのだから。

——地獄を見た。その場で唯一意識があつた少年はそう思わざるを得なかつた。

無理もないだろう。巖戸台と人工島を結ぶムーンライトブリッジはその日、紅蓮の炎に包まれていたのだから。

「な……にが……」

頭でも打つたのか、思考がまとまらない。状況を確認するために自分の上ののつかっていた生暖かいモノをどけようと手を伸ばそうとして少年は気付いてしまった。そのモノが見覚えのある布に覆われていることに。見間違えるはずがない。それは、母が旅先で好んで着た服だったから。

恐る恐る少年が周囲を見回すと、そこには転がっていた。さつきまで命だったモノが——、命^母だったモノが——、命^親だったモノが——、命^父だったモノが——、あたり一面に転がっていた。それを認識した途端、朦朧とした意識にっ先刻見た光景が甦った。橋の上から見える建物が爆発

した瞬間、周りの車がすべて停止したこと。両親が自分に覆いかぶさったと思ったら、橋が炎に包まれたこと。そして、この地獄が1体の異形の存在によって生み出せられたことを。自分が生き長らえたのは、そのバケモノを機械人形が今もなお押さえ込んでくれているお陰だということを。

胸の内に湧き出た感情は、恐怖でも悲しみでもなく純粋な憤怒であった。

「ふざけるな……！」

少年が呟いた。それは家族に降りかかった理不尽への、そして自分の無力さへの怒り。

「僕たちが何をしたっていうんだ」

許せなかった。納得がいかなかった。だから痛みを堪え、立ち上がる。闘いの渦中へと一步、また一步近づく。

「お前を僕は……俺は絶対に許さない!!」

この理不尽に反逆すべく少年は進む。有里湊バケモノを滅ぼす者になりたいと心の底から願う。

ゆえに彼がその力を心の海から引き当てたのは必然だったのだろう。強大な闇に対抗しうる光。それが少年を包み込み変身させる。

そう、その名は

「アギトっ!!」

光と闇の闘いが、今、始まる。

第一章

Episode. 1 誕生の春

——草木も眠る丑三つ時、には二時間ほど早い深夜零時。街中の機械は機能を停止し、ありとあらゆる生命が黒い棺のオブジェに変貌する。薄緑色の月が爛々と輝く中、大地に血痕が点々と浮かび上がる。

文字通りすべてが停止した異様な夜の街を『有里湊』は荷物を積んだ愛車のエイプ100を押しながら歩いてきた。このような異常事態に特に驚いたような素振りをみせず、むしろうんざりした表情が顔に浮かんでいた。

「こんなことなら、道の駅を見つけ度る度に買い物するんじゃないかな。」

本来ならば日を跨ぐ前に到着する予定だったのを、道草を重ねたせいでこの奇妙な時間帯に慣れない街をバイクを押しながら彷徨う羽目になった。遅れると分かっても、つつい美味しそうな食材に目を奪われてしまうのは料理好きの性さがだろうか。

「あの怪物たちと出くわさなきやいいけど…。引越し当日に戦うのは骨が折れるだろうし。」

敵影がないか確認しながら慎重に進んでいるうちに目的地であるレトロチックな洋館にたどり着く。月光館学園巖戸台分寮。それがこの春からの新た住処である。

寮の中に入ってみると、目に飛び込んだのは高級そうな家具の数々。

(…そういえば元々ホテルだった建物を使っているってパンフにあったけ)

などと思いつながら人っ子一人いない屋内を見回す。テレビとパソコンがそれぞれ一台ずつあったが、この時間帯ではそもそも機械が動かないので暇つぶしに使えない。

(やれやれ。今は音楽プレイヤーも使えないし、かといって本を取り

出すために荷を解くのも面倒だな。キッチンでも見に行くか。」

そう考え、ラウンジの奥に行こうと歩を進めたその時――。

「…遅かったね。」

唐突に声をかけられて、思わず湊は身構える。この時間で肉体と意識を保っていられるのは彼以外にもごく少数存在するが、そもそも建物に入った時点でラウンジは無人だったのは確認済みである。

果たして、声の主は囚人服のような縞柄のシャツを着た黒髪の幼い少年であった。夜空を思わせる濃い碧眼を細めながら囚人服の少年はにこやかに語りかけてくる。

「長い間、キミを待っていたよ。」

「生憎、俺に生き別れた兄弟とかの類はいないはずだけど。」

少年の言葉に湊は思わず即答する。10年前の事故の記憶が抜け落ちていたとはいえ、それ以外の思い出はちゃんと覚えている。少なくとも亡くなった両親がそのようなことを言っていた覚えは全くない。というより、男に思いを馳せられても微塵も嬉しくない。

「アハハ。つれないね。ま、いいよ。それじゃこの先へ進むなら、そこへ署名を。」

苦笑しながら囚人服の少年は一冊の宿帳を差し出す。

「…署名?」

「そう、一応契約だからね。」

はて、入寮の契約なら済ませたはずだと首を傾げながら湊が宿帳をのぞき込むと、酩酊感のようなものに襲われる。ぼやける意識の中で、自分の中の何かが体を操っているかのような錯覚に陥る。覚束ない手が「有里湊」と記すのを他人事のように見つめる。

「怖がらなくてもいいよ。ここから先は自分に責任を持ってもらおうっていう、当たり前の内容だから。」

――目の焦点が定まらない。

「時は、全ての者に結末を運んでくる。例え眼と耳をふさいでいてもね。」

「いったい何を…。」

――体に力が入らない。

「さあ、始まるよ。」

いたずらつぽい笑みを残して囚人服の少年が消える。それと同時に体が正常になる。一体どこに消えたのかと湊が辺りを探っていると――。

「よつ、転校生。」

陽気な声をかけられて、湊は意識が現実に戻される。そして思い出す。どうやら退屈な始業式から教室での終礼まで白昼夢を見ていたらしい。自分の机の前に人が立っていたことすら気が付かなかった。

「えつと、俺のこと？」

「マイペースなやつだなー。そう、お前のことだよ。オレは伊織順平。順平でいいぜ、シクヨロー」

「し、シクヨロ…？」と若干死語に片足を突っ込んでいるクラスメイトの挨拶に湊が戸惑っていると

「ああ、こいつアホつぽいけど悪い奴じゃねーから。別にカツアゲとかしないから。不良つぽいけど馬鹿なだけだから。」

もう一人の男子生徒が口を挟む。「あ、ちなみにオレは友達健二な。」とこれまた陽気そうな男である。

「よろしく。俺は有里湊。えーと、君が健二で、そっちが順平だね。」
「そうそう。普通の高校生とアホつぽい不良って覚えればいいから。コイツ、後輩の女子から『先輩って、口だけじゃなくて頭も軽いのね！』って言われるレベルだから。」

「うるせーよ！ちよつとテストの点が悪いだけだろ！てか、人のトラウマを抉るのをやめろオ！」

男子三人でにぎやかにやっている、「まったく、アンタたちは相変わらず馴れ馴れしいんだから。少しは相手の迷惑考えたほうがいいんじゃない？」と女子生徒――『岳羽ゆかり』がやってくる。ちなみ

に彼女も湊と同じ寮生であり、学校まで道案内してくれた人である。

「なんだよ、親切にしてるだけだつて！」

「そうだぞ。下心があるのは順平だけだつて。」

「ねーよ！どんだけオレ、信頼されてねーの!？」

ゆかりは（自称）親切な二人に一瞥をくれると、湊に「偶然だね、同じクラスになるなんて。」と微笑みかける。そして声のトーンを落として「昨日のこと、誰にも話してないよね？」と訊ねる。

しかし、場所が悪かった。あつさりと順平と健二に聞かれてしまった。というより、あれだけ近くにいるのだから聞くなという方が無理だろう。

「え!?!ゆかりっち、もしかしてソイツとそういう関係？」

「はあ？そんなわけないじゃん！ちよつと初対面の時に迷惑をかけただけ。」

ベタな誤解をする順平とそれを解こうとするゆかりを眺めながら、湊は『昨日のこと』を思い返す。囚人服の少年が消えて、間が開かない内にゆかりが上の階から降りてきたのである。拳銃を構えながら――。

（さすがに、あれは焦った。けどあの感じだと…知っているのか？）

明確に何かを警戒していたゆかりと、あの場を鎮めた『桐条』という先輩の言動からして、彼女たちは毎晩発生する奇妙な時間帯と『怪物たち』のことは知っているようだ、などと湊が推察していると。

「湊はさ、ぶっちゃけ岳羽のことどう思ってるの？てか、どういうコがタイプなわけ？」

と未だに言い争っている二人を尻目に健二が興味深々に聞いてくる。

（これといったこだわりは無いけど…）

ふむ、と少しばかり考えてから思ったことを話す。

「岳羽さんとはただの同じ寮生だよ。ま、可愛い子なら誰でも好きだよ、俺は。歳とかはあんま関係ないかな。ああ、でも包容力が有れば最高だね。」

「分かるわー。お姉さん系ってイイよな。ま、俺オレは年上好きだけ

どな。」

どこにでもあるような日常が繰り広げられる中で、刻一刻と非日常が蠢きだす。

Episode. 2 戦士降臨

新学期2日目の放課後。伊織順平はげんなりした表情でポロニアンモールのベンチに寝転がっていた。

「はぁ……。やってらんねえ。」

別に順平は早めの五月病にかかったわけでも、毎日学校に行くのにうんざりしたわけでもない。むしろ、学校自体はそんなに嫌いではない。友近を始めとする悪友たちとくだらない話に花を咲かせるのも好きだし、新しく来た転校生もなかなか面白い奴でつるんで楽しい。

順平が不貞腐る理由は彼の家庭事情にあった。彼の父は不動産投機に安易に手を出し、失敗。今では昼間から家で酒をあおり、些細なことで家族に怒鳴り散らす人でなしと化していた。

「料理酒で酔っぱらいやがって。情けねえったらありやしねえ。ああなつてたまるか！」

順平の胸中に渦巻くのは父親への侮蔑。そしてあの男の血を引く自分もそうなってしまうのではないかという焦燥感と恐怖心。先程までは白い野良犬相手に愚痴っていたが、それもどこかへと行ってしまった。吐き出す相手のいない負の感情はますます大きくなるばかり。

だからこそ、違和感に気が付くのが遅れてしまった。本来、買い物客で賑わうはずの夕方のモールに全く人気がないことに。まだ営業時間内のはずなのに店内BGMがかかってないことに。

「ん？なんか、やけに静かだな……。って、なんじゃこりや!？」

機械が機能を失い、広場のアナログ時計が午後6時を示したまま停止する。モールの床に赤い血痕が浮かび上がり、黒い棺が乱立する。それらを優しく照らす夕焼けがおぞましくも、美しくて……。そして、次に起こった異変を見て順平は言葉を失った。空中に半透明のシルエットが出現し、それが徐々に色を、質感を得ていく。舞い降りたそれは天使の意匠を持つ二足歩行の豹——ジャガーロードパンテラス・ルテウス^豹。

「あ、あ・・・アンノウン・・・？」

辛うじて順平の口から出たのはネットを賑わす都市伝説の怪物たちの総称。人間を木の口ウに生き埋めにする、高層ビルの一階に高所からの転落死体が現れるなどの巷を騒がす人間には実行不可能な殺人——不可能犯罪——の犯人と噂されるその怪物が、悠悠と順平に近づいて行った。

逢魔が時はまだ始まったばかり。

——同時刻。

有里湊は重大な選択を迫られていた!!

「セールのニシンにすべきか、それとも豚ヒレ肉にすべきか・・・。」
巖戸台商店街のスーパーマーケットで湊は夕飯のメインをどうするかを悩んでいた。聞く人によってはずっこけてしまいそうな内容ではあるが、料理好きの湊にとって何よりも重要なのである。旬物のニシンにすべきか、食欲に従って肉にすべきか。しかし、せつかくのセールを逃すのも悔しいし、魚は買った当日に食べたい。

そんなことを悩んでいたその時。

——キーンと

湊の頭の中にノイズが響く。それと同時に彼の顔から一切の感情が消える。いや、正確に言えば僅かに怒りが顔に浮かぶ。

(音の発生源は・・・ポロニアンモールか・・・)

そう判断するや否、湊は店外に止めてあつた愛車のエイプ100に跨り急発進する。人目の少ない裏路地をルートとして選ぶ・・・

「変身!!」

どこからともなく黄金と黒のベルト——オルタリング——が腰に出現すると同時に叫ぶと乗っているバイクごと光に包まれる。

光が納まると、そこには大型の戦闘バイクであるマシントルネイダーに跨る超越肉体を持つ金の戦士——仮面ライダーアギト・グランドフォームが姿を現す。アギトはマシントルネイダーのスロットルを全開にし、アンノウンのいる現場へと急行する!

——そして舞台は再びポロニアンモール。

「く、来るな！」

尻もちをつきながら後ずさる順平に対して、ジャガーロードは小馬鹿にしたような笑みを浮かべながらワザとゆったりとした動きで歩み寄る。

「来んなって言うてんだろぅがコンチクショー!!」

ヤケクソ気味に近くにあつた空き缶を投げつける。本来ならばそんな攻撃などアンノウンにとって痛くも痒くもないだろう。そう本来ならば。

空き缶がジャガーロードの顔面に当たった瞬間、それが突如発火したのである。予想外の一撃にジャガーロードが僅かによるめく。

「うおっ!? スゲツ！今のオレがやったのか?もしかしてオレ、超能力者だったり・・・」

しかし、喜びもつかの間。体勢を立て直したジャガーロードの瞳に明確な殺意が宿り、今にも飛びかからんと身を屈めた次の瞬間。突如現れた大型バイクに跳ね飛ばされた。受け身を取る間もなく何度も地面を跳ねながら転がるジャガーロード。場に突然現れた謎のライダーを見て、順平は思わず呟いていた。

「仮面・・・ライダー・・・アギト・・・?」と。

謎の怪物アンノウンと人知れず戦う戦士。目撃したと主張する人々の述べる特徴は完全に一致しているのにも関わらず、金、青、赤とそのカラーリングに関してだけは必ず食い違う。ある者は彼を人類の守護者アギトと。またある者は有名な特撮シリーズのヒーローから取って「仮面ライダー」と呼ぶ存在。それが順平の眼前に出現したのだ。驚くのも無理はないだろう。

よろめきながらも立ち上がったジャガーロードが今まで以上の殺気と憎悪を纏いながらアギトと対峙する。そして、僅かに身を屈めると目にも止まらぬ速さでアギトに殴り掛かる。鉄塊をも砕き得る

その拳は、いとも容易く受け流されカウンターパンチを浴びせられる。

「ガッ!？」

想像以上の威力に思わずうめき声をあげるも、なんとか踏みとどまり鉄拳の連撃を浴びせる。しかし、その悉くはアギトの無駄のない動きで受け流されるか、流麗な蹴撃に叩き落される。音速を誇る貫手も手刀で切り払われる。

正面からやりあうのは不利と判断したのか、すかさず背後を取ろうとするも、足を払われ流れるように腹部に踵落としが決まる。痛みを堪えなんとか起き上がるも、間が開かない内にヘッドバットが繰り出され、そのままローリングソバットで蹴り飛ばされる。

繰り広げられるは蹂躞劇。今まで弱者を躰るだけの畜生と歴戦の怪物殺しの実力差は一目瞭然であった。

「一方的だな、おい。助けてもらっておいてなんだけんどちよつと引いちやうレベルだな。」

順平がこう思うのも無理はないほどに。

「ハアアツ・・・」

アギトは倒れ伏すジャガーロードを見据えると気合一声。すると頭部のクロスホーンが展開し、足元にアギトの紋章が輝きだす。紋章が脚に収束するや、跳躍し必殺キック——ライダーキックをジャガーロードに放つ!

文字通り必殺のライダーキックは相手を貫き、頭部に天使の輪を出現させながらジャガーロードが爆ぜた。

敵の消滅を確認すると、近くで呆けている順平に目もくれずにマシントルネイダーに乗りアギトは立ち去った。

「なんだったんだ? ホント・・・」

順平が未だに呆けている間に、止まっていた時間が動き出し、黒い棺が人の姿に戻る。アンノウンが倒されたことが原因だろうか。しかし、順平にはそんなことを考える余裕もなかった。

「あれが、幾月さんが言っていたアギトか。ふん、小規模な影時間を確認しに来てみれば、とんだ掘り出し物だったな。アレはかなり強いぞ。面白くなってきたじゃないか。」

そう、アギトとアンノウンの闘いを見ていた者がもう一人いた。対未確認生命体用ワードスーツ、通称G3をまとったその人物——声からしておそらく男——はモールの屋上に佇みながら通信機能で誰かと話していた。

しかし、些か好戦的な態度を通信相手に咎められたのか、慌てて話題転換をする。

「まあ、そうカツカするなって。同時に適性をもつ奴も見つかったからいいじゃないか。念のために伊織って奴をつけてみるさ。美鶴、お前はフォローを頼む。」

そう言つて、G3は通信を切りぽつりと呟く。

「できればアギトと戦ってみたいのだがな……。」